

ひとの目、わたしの目 駒田晶子

先日、仙台で催された『リアス／樁』梶原さい子（砂子屋書房）を読む会に参加した。著者の梶原さい子さんと知り合ってから、六年ほど経つのだろうか。印象深い第三歌集だった。歌集は、東日本大震災前とその後の、二部立てだ。著者の実家は、津波で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市唐桑地区の神社。震災直後の、生まれ育った土地の、生死が混濁している大変な状況を、短歌の定型に切りとってゆく姿勢が鮮明だ。読む会は、唐桑地区の生活と地震との関係を調査してきた民俗学の植田今日子先生の講演が、よかった。明治三陸大津波（1896）、昭和三陸大津波（1933）、チリ地震津波（1960）と、繰り返し津波の被害を受けてきた唐桑地区。人々は命を奪われながらも、海に祈りを捧げ、海とともに暮らし生きてきた。震災後、仮設住宅での生活を続ける住民達の記憶と言葉をたぐり寄せながら、地図を作りあげる。この地図を差しこみながらのお話は、歌集の読みの裏づけとなり、興味深かった。この地図に記された地域での暮らしは、もう戻らないのだから。もう一つは、読む会に出席されていた米川千嘉子さんの五分ほどの短いお話が、印象に残る。「東日本大震災から三年を経て、『リアス／樁』と『磐梯』という、とてもいい歌集が出された。二冊は、作者の住んでいる土地との関わりが深く、海の歌集、山の歌集とも感じられる。言い方は適当でないかもしれないが、海と山では、死への感覚が、まったく違うのではないだろう

うか。亡くなる人の数も関係するのかもしれないが、海の死はか
るく思え、山の死と重さが異なるように感じた。」と仰った。山
育ちの私が『リアス／樁』に、大きな衝撃を覚えた理由が、少し
納得できるような気がした。

・皆誰かを波に獲られてそれでもなほ離れられない 光れる海石
・ありがたいことだと言へりふるさとの浜に遺体のあがりしこと
を

・泡の間にあまたの息の溶けゐるを思ひつつをり 一途に啜る

『リアス／樁』梶原さい子

・みちのくの死者死ぬなかれひとりづつわれがあなたの死をうた
ふまで

・ふくしまのゆふべのそらがかき抱くかなかなのこゑ死者たちの
こゑ

・忘れえぬこゑみちてゐる夏のそら死者は生者を許さざりけり

『磐梯』本田一弘

二冊より意図的に選歌してしまっただけで、死者との距離が、
異なる。梶原作品は、海の死者と生者の距離が、とても近い。掲
出した一首目は、東日本大震災以前の作品だと思ふとき、海で暮
らしている人々の、その場所でなければならぬ必然を、つよく
感じる。二首目、あがった遺体への感覚。三首目、めかぶを扱っ
た連作の中の一詩であるが、死者たちの息が溶けていると思いな
がら啜りあげる姿に、循環する命を感じた。一方の本田作品には、
竹山広さんの作品の影響を感じた。死者と生者に絶対的な断絶が
ある。死者の絶望をつよく感受し、抱え込みたいという作者の意
識が立ちあがってくるのだ。歌集を読む会によって、変動する自
分の読みもあるのだ、と気づいた。